151

Martius 氏手術による膀胱腟瘻の治驗

內藤 勝利

(長崎醫科大學產科婦人科學教室)

膀胱腟瘻はその頻度に於ては決して多いものではない．しかし一度び本症を發生すれば患者の苦惱は甚大であつて，その小さいものは稀に自然治癒と云ふ僥倖をみることがあるが，大多數は手術療法以外には治癒を來すことがなく，しかも萬一この手術療法が失敗に終るやうなことがあれば，瘻孔は術前にまして廣大となり，患者の身心の苦惱を增大せしめ洵に慘めな狀態となること，かの再發癌につぐものであることは多言を要しない．

近時，本症に對する手術々式の進步改善によつて本症の治癒率も著しく向上し，殊に比較的廣大な腟瘻に對しては，本邦に於ては所謂瓣形成法 Lappenmethode[1] が最優秀な方法として專ら施行されてゐるやうに思はれる．

余は，某婦人科醫によつて前腟壁下垂の整形手術を受けて膀胱腟瘻を發生し，爾後專門醫から5回に亙つて反復施行されたるも凡て失敗に終り，依然として存續せる廣大なる腟瘻を有する婦人に遭遇し，これに Martius 氏の Vulvo-cavernosus-fettlappen-plastik[2] を行ひ，完全に治癒せしめ得たので，ここにその經過を簡單に報告して諸家の批評を仰きたいと思ふ．と云ふのは本症に對する Martius 氏手術の價値については泰西の報告[3] が少くないに反し，本邦での報告例が見當らないやうに思へたからである．

患者．中○某．31歲，第1回經產婦．29歲の時正常分娩を終へて後5ヶ月目に前腟壁下垂を來し，某婦人科醫から整形手術を受けたが，術後1週目から膀胱腟

1) **三林隆吉**: 產科と婦人科．昭和13年1月，14年11月．
2) **Martius**: Gynäkologische Operationen. (Leipzig) 1937.
3) **Anselmino**: *Zentralblatt für Gynäkologie.* 1941, s. 767.

[醫學と生物學・第1卷・第11號・頁・521－523・昭和17年6月5日]

瘻を發生した（1939年9月）．その後他の專門醫から，2回（1939年12月，1940年2月）整形手術を受けたが成功せず，さらに他の專門醫から3回（1940年4月，5月，7月）反復施術されたが（いづれも瓣形成法であることは記載により明瞭となる），凡て失敗に終つた．

かくして當クニリークに入院したのが1941年6月9日で，最終月經終了後8日目であつた．全身狀態には異常がない．

局所所見：外陰及び會陰肛門周圍は尿の刺戟によつて一面褐色に着色し濕疹し，外尿道口には異常がないが，腟に手指を挿入すると，腟前壁中央部に2指を容易に通じ得る程度の缺損があり，これによつて腟腔は膀胱と廣大な連絡を營んでゐる．しかして尿瘻周圍の腟壁は正常の伸展性なく堅い瘢痕を形成し，殊に左側は著しく耻骨弓に及んでゐる．子宮は前傾前屈で，大きさ硬度ともに正常，附屬器は觸れず，子宮の移動性は良好である．腟鏡診上．前腟壁中央に相當して，前方は外尿道口から約2cm，後方は子宮腟部前方約3cmに及ぶ長さ約3cmの瘻孔があり，その邊緣は不正で，膀胱粘膜が反轉し，周圍腟壁は蒼白で一見して瘢痕形成を思はしめ，尿は全部腟に流出してゐる．しかし膀胱カタルその他炎性症疾患の合併はなかつた．

手術 入院後3日間は念のために尿路消毒劑を與へ，術後膀胱炎の併發に備へるとともに强心劑によつて心機能を鼓舞して後，手術を行つたのであるが，その要點は，まづFüth氏法によつて瘻孔を閉鎖し，續いて右側大陰から約5cmの長さ，示指大の幅を有するVulvo-cavernosus-fettmuskel-lappenを形成して，これを以て膀胱縫合部と腟壁との間を充塡して手術を終つた．但し本手術は前回手術による瘢痕形成のために殊に瘻孔の周圍に再度の瓣形成に際して，かなりの困難に遭遇し，手術時間3時間を要した．

後療法 術後持續カテーテルを措き，排便を禁じ，5日目よりカテーテルの交換を行ひ，14日目にこれを除去したが，11日目から1日數時間コツヘルでカテーテルを挾んで膀胱を充滿させてみたが異常がなかつた．15日目から自然排尿（1回200cc位）が可能となり當日浣腸を行つて排便せしめることに成功したが，17日目には豫定月經があらはれた．

他方外陰の創傷は8日目に拔絲，よく癒合してゐたが，腟からの分泌物はかなり多量であつた．10日目に腟の拔絲を行つたが腟壁の癒合は不完全に終り，丁度術前の腟缺損に相當部だけ哆開し，その底面に赤色の肉芽組織が露出し，附近一面には高度な浸潤があり，多少の壓痛を認め，かつ傷分泌は相當量に上つてゐたので，爾後腟の清拭を反復經過を見てゐた所，分泌物は漸減し術後30日には傷面の浸潤性硬結も消失，表面に上皮覆被を來したが，なほ接觸に對して多少の出血をみた．

當日の膀胱鏡所見は，膀胱容量200 cc 左右尿管開口位置は正常，膀胱三角部の前半は少しく一様に隆起し，該部粘膜は光滑なく貧血して瘢痕形成を示し，從つてカテーテル挿入に際して多少の抵抗を與へる．

かくして術後35日目に喜々として退院したのであるが，なほ退院後3ケ月間の性交を禁じた．3ケ月後の診察では前腟壁部の肉芽面は完治してゐたのである．

結　言

本例は現在最優秀法と見做されてゐる瓣形成法が全く失敗に終つた廣大なる膀胱腟瘻に對する Martius 氏手術の成功例であつて，本症に對する Martius 氏手術の卓越せることを裏書したものと云へる．

しかして本例の經驗から，腟壁ことにその前壁は患者體位の變化，腹壓等によつて術後餘程愼重な處置を以てしても曳引乃至伸展を免れ得ずして創面縫合は哆開し易いものであることが察知できる．從つて腟瘻の手術に際してはできるだけ腟壁の除去を避けるべきであつて，このことが本症に對して瘢痕切開瓣形成法が新創面形成法よりも優れてゐる重大原因であると思考するのであるが，余の經驗例に於ては數回の手術による腟壁の瘢痕化その他のため腟壁の餘裕なくして創面の哆開に至つたものと思惟され，もし本例に Martius 氏法を行つてゐなかつたならば必らずや不成功に終つたことを斷言し得るものである．

（受附：昭和17年5月13日）